

アメリカ合衆国における博物館の発達について（上） （暫定訳）

矢島國雄* ・ 伊藤平八** ・ 金成太郎** ・
杉山俊輔*** ・ 藤代聡子** ・ 松田千穂****

緒言

本稿は、2001年度の博物館学特説Ⅰ、博物館史研究での、アメリカにおける博物館の歴史を学ぶにあたって、特説受講生とともに共同で訳したものである。原文は、アメリカ博物館協会の機関誌、“Museum News” 1996年3・4月号の同誌創刊75周年記念の特集論文で、1920年代から1996年までのアメリカの博物館の歴史を3章にまとめて論じたものである。第1章はフィリップ・D・スピース2世、第2章はテリー・ゼラー、第3章はウィルコム・E・ウォッシュバーンによる。

原著にある各著者の紹介は次のとおりである。

スピース2世は、文化史学者であり、博物館コンサルタント、歴史研究機関管理官である。最近では、ジョージ・ワシントン大学博物館研究講座の準専門講師を務め、19世紀(の文化史)研究で博士号を取得している。

ゼラーは、北イリノイ大学の美術専攻の準教授で、この論文は彼の未刊行の著書『民衆のための大学：アメリカの博物館における教育とイデオロギー』（1996）の第11章、第13章をそのまま掲載したとのことである。

ウォッシュバーンはスミソニアン研究機構アメリカ研究プログラムの委員長で、ワシ

ントン特別区の国立郵便博物館の上級歴史研究員である。

なお、本稿を暫定訳としたのは、論及されている連邦の法や政策、連邦や州の各種の機関や団体の名称、さまざまな社会的運動の呼称などについて、アメリカ史等の領域で定訳があるものか否かの調査が不十分であること、博物館関係でも、その組織上の役職名をどう訳すべきかが判断できないものがあることなどによる。また、各論文ともかなり多くのことがらをコンパクトに記述しているためもあって、概念的・抽象的な言い回しが多く、誤訳の恐れを残す部分があること、訳文が充分こなれた日本語にはなりきっていないことも暫定訳とさせていただきたい理由である。

なお、紙数の関係で第3章及び年表、注の関係論文の抜粋等は次号に掲載する。一部、原文にはない小見出しを適宜加えたことを付記しておく。

第1章 1920年代、30年代のアメリカの博物館：新たな専門化に向かって

はじめに

「それは最高の時であったが、最悪の時でもあった…」。ディケンズの有名な書き出しにあるように、この二つの10年間一激動の20年代、ローリング・トゥエンティと大恐

* 本学文学部教授 ** 本学文学部3年生 *** 本学経営学部4年生 **** 放送大学教養学部3年生

慌の30年代一を現すこの言葉は、『ミュージアムニュース』誌の最初の20年間でもあった。大恐慌以前は、博物館のみならず広く各種の文化にとって最高の時代であった。広範な繁栄は博物館の発達一数の増加、規模の大型化、専門的な思考方法や活動一を許容していた。多くのものにとって大恐慌以後は最悪のときであったが、おおかたの博物館は何とかやりくりして自己を守ることができた。それは、博物館が、これに先立つ10年の間に広範な大衆と共に自己を確立してきていたからであり、博物館は30年代を通じて急速に過ぎ去ってゆくように見える過去の世界との信頼される連続性を留意してきたからである。

博物館の教育的役割への認識

南北戦争後の数年で、アメリカの博物館は最初の大成長を遂げた。ニューヨーク、ボストン、シンシナチ、ピッツバーグ、シカゴ、その他の大都市において、一つまたはそれ以上の博物館が創設された。それらのほとんどは、個人コレクションや、後援者の地域での産業会社の成功によって得られた富による莫大な寄付によっていた。博物館が社会的な（威信）の展示の場であり、金持ちの趣味の場であった時代である。しかし、1893年のシカゴでの世界コロンビア博覧会後は、実用的で美しい都市計画の未来像が具体化し始める。都市は博物館を公共政策に組み入れ始め、飾り立てたシティーホール、堂々とした列車の駅、カーネギー図書館、整備された公園や大通りといったものが、それぞれ作られる。これら全てが「美しい都市」づくりの運動であった。社会的な展示の場としての博物館は、市民の展示の場、公共の誇りの場へと変化したのであった。

この段階は、ニュージャージー州ニューワークの無料公共図書館のライブラリアンであり、ニューワーク博物館協会の初代会長（founding director）であったジョン・コットン・ダーナ（1856-1929）によって達成さ

れたものであった。論争家で、革新家で、先見の明のあったダーナは、近代博物館は地域サービスと教育事業のセンターとなりうると信じていた。彼は、当時の博物館の状態は「暗い」が、博物館の将来の見通しは「明るい」という意見を、1916年から亡くなる1929年まで、一連の講演や出版物で発表し続けてきた。この一連の講演や出版は、ニューワーク博物館の示した実例のおかげで、広く影響を与えた。ダーナは、博物館は「それを持つコミュニティにとってはっきりとした価値となるに違いない」と「予言」（彼の言葉によれば）していた。

教育活動が博物館の公共的役割の中心であるべきであるという意見の、もう一人の顕著な支持者はヘンリー・ワトソン・ケントだった。彼はメトロポリタン美術館の副長官（assistant secretary）で、1905年ごろから各種の公共プログラムを開発してきた。それらは、今日も、ほとんどのアメリカの博物館で採用されているもので、展示室講話（gallery talk）、学校の集団見学、学校への資料貸し出し、博物館の出版事業や、障害を持つ子供たちにも博物館への知的なアクセスを留意するものであった20年代初期のラジオの登場以後の障害児向けのプログラムなどである。

同様に、ボストン美術館の長官（secretary）であったベンジャミン・アイプス・ギルマンも、1906年ごろから博物館における講演と出版をはじめた。翌年には、彼は博物館の解説ツアーに訓練を受けたガイドを充てた。1915年のアメリカ博物館協会の年次大会において、博物館の教育的役割に対して「ドーセント（docent）」という言葉を用いたのがギルマンである（彼はこの言葉を17世紀のロード大主教から借りた）。彼はまた、博物館疲労の理由の科学的な研究をした最初の一人でもあった。博物館疲労というのは、博物館を訪れたときしばしば経験する実

際の身体的不快感のことである（この用語が最初のあらわれるのは19世紀のことである）。

博物館職員の専門性と訓練

博物館の数が増えるとともに、ダーナやケントやギルマンによって推し進められた挑戦を受け継ぎ、これを受け入れるならば、専門的な訓練を受けた職員が必要であるということが認識されるようになった。訓練に関する討論—そしてこれに続く行動、その大部分は博物館で働く女性によって行われたものだが—は、20世紀の最初から始まった。アメリカ博物館協会が1906年5月に創設されたのもこうした動きに付随するものであった。博物館職員の専門職としての知名度は、1923年、スミソニアン研究機構（Smithsonian Institution）に事務所を置いたアメリカ博物館協会が常勤の職員を置き、全国的な活動の指揮をとり始めたことによって大きくあがることになった。クーパー・ユニオンの総帥であったチャールズ・ラッセル・リチャーズ教授（1865-1936）が、アメリカ博物館協会の初代理事長（executive director）に就任した。リチャーズは直ちにヨーロッパの博物館に学ぶために旅立ち、ミュンヘンでは1923年11月8・9日のヒトラーの「ピアホール暴動」の間、レジデント博物館に留め置かれることになった。彼はこの出来事を、アメリカ博物館協会総務部長（Secretary）ローレンス・ベイル・コールマンの編集した『ミュージアムニュース』創刊号に書いている⁽¹⁾。

1920年代の博物館での仕事の焦点は、引き続き公共への教育プログラムと博物館専門職の訓練プログラムに置かれていた。実際、二つの最もよく知られている初期訓練プログラムはこの時期に始まっている。その第一は、ハーバード大学フォッグ美術館における「博物館の仕事と博物館の問題」というポール・J・サッシュュのコースである（1921）。このコースは、現在の訓練プログラムと非常に良く似ている。そこでは、博物館経営、収

集、保存、展示、博物館史、博物館の倫理といった項目がカバーされていた（アメリカ博物館協会は、1925年にその最初の「博物館職員の倫理基準」を出版している）。サッシュュは、後に1932年から1936年までアメリカ博物館協会の会長（president）を務めるが、1944年に亡くなるまで彼のコースで教えていた。

第二のプログラムはダーナによるニューワーク博物館のもので、1925年の新博物館の開館と同時に開始された博物館で働く人のための学校である。ルイス・コノリー監修のニューワーク・プログラムは実践的な経験に焦点をあてたコースで、本当の見習い期間によって教えるものであった。E・T・ブースは、1928年の『博物館における見習修行』において、その哲学や訓練内容について書いている。1926年、最初の卒業生たちは、全て女性であった（当時、女性は博物館における上位の役職の驚くべき割合を占めていた）。

いまや、ハーバード流の理論に基づくものであれ、ニューワークの実用的なアプローチによるものであれ、ある種の博物館研修は以前にも増して必要とされていた。アメリカ博物館協会訓練委員会（Committee on Training Work）は、「現在、博物館の仕事に就いている人々は、その職業のための特別な学術的訓練を受けていない」ことに気づいていた（1926）。委員会は、「そのような訓練を効果的に行うには、大学が提供する理論的なコースと博物館の提供する実践的なコースの密接な協力が求められる」と結論し、理想的な博物館職員の訓練プログラムの基準を定めた。しかしながら、1960年代に至るまで、この理想的なプログラムが完全に実現されることはなかった。

新しい博物館⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾

博物館職員の研修が必要であるということは、急速に広がる性質のことであった。博物館が発展するにつれ、職員はより専門的にな

る傾向があった。一方、同時に、技術の進歩は近代的な保存、研究、展示技術の新しい可能性を開いた。例えば、フィールド自然史博物館は1924年に、遺体を包む包装を解くことなくミイラのX線検査を行った。ケース展示の照明に、反射鏡つきの電灯照明システムを活用することが、1927年のアメリカ博物館協会「新シリーズ」の紀要、『博物館（人工）照明活用派』の内容であった（このシリーズは、アメリカ博物館協会技術情報サービス（Technical Information Service）の先駆けである）。

博物館教育を改善するためのまったく新しい展示概念としての「文化的環境」という考え方もまた、この時期にヨーロッパから輸入された。この考え方は1920年代、1930年代のアメリカの博物館に三つの主要な展示形態、すなわち、時代室、野外歴史博物館、産業博物館を持ち込んだ。19世紀中ごろにドイツとフランスに始まる時代室は、1876年のフィラデルフィア百周年記念展に続く植民地時代復興運動の勃興する中で人気を博した。1909年のハドソン・フルトン記念博覧会では、初期アメリカ装飾芸術に対する情熱が爆発した。時代室流行のこの二つの目覚ましい結果は、ニューヨークのメトロポリタン美術館に時代室を実現させた。大規模な時代室と装飾芸術が連なるメトロポリタン美術館のアメリカン・ウイングは1924年に開館した。ジョージ・グレイ・バーナードのコレクションであるフランス、スペインの大きな中世僧院建築遺構である「修道院（The Cloisters）」が、ジョン・D・ロックフェラー・ジュニアによって、1925年にメトロポリタン美術館の所有になった。この「修道院」は、ニューヨークのトゥリヨン砦公園に移され、1938年、壮大な規模の時代室だけで構成したメトロポリタン美術館分館として再開館された。

ロックフェラー（の貢献）は、この「修道院」にとどまらなかった。1926年、ヴァージ

ニア州ウィリアムズバーグでW・A・R・グッドウィン師に会ったまたとない機会が、アメリカで初の修復型の大規模な野外博物館の誕生につながったのである。ロックフェラーは、かつて、ランスの大聖堂、ヴェルサイユの宮殿と庭園を修復しているが、グッドウィンはロックフェラーに、この沈滞したヴァージニアの町も、その植民地時代の素晴らしさに修復してくれるよう望んだ。彼は、1926年から1928年までまったく秘密裏に修復を行い、1928年から1960年の彼の死まで公開した。ローリー・タバーンが修復され一般公開された最初の建物である（1932年）。他のウィリアムズバーグの建物も同様だが、その成功は、ロックフェラーに、ニューヨーク州タリータウンの彼の家の近くにある歴史的な遺跡の復元をさせることにもなった。

1920年代、30年代のアメリカ社会の多くの要因が野外博物館の成功の機を熟かせていた。その最も顕著な要因は自動車であった。激動の20年代には、自動車生産はアメリカにおける大きな産業となり、なお成長し続けていた。道路建設のために各州に援助を与える1921年の連邦高速道路法（Federal Highway Act）は、最初の全国的な高速道路網を発達させることを促した。新しい道路と乗り物は、観光事業を急速に興隆させ、野外博物館の成功に貢献した。同時に、農業経済を基盤とする田園の小さな町での伝統的な生活は、産業主義に基礎を置く都市の活気のある生活に道を譲った。観光旅行をするアメリカ人たちは、過去に対するノスタルジーを増大させてきた。

そんな一人がヘンリー・フォードである。フォードは、1919年、名誉毀損の裁判で認められたように、自動車についてはとてもよく知っていたが、歴史についてはほとんど何も知らなかった。しかしこの裁判は、彼にモノに表された歴史について考えさせ、「自分たちの祖先たちがどのように暮らしていたのか見

せることや、自分たちの祖先たちはどんな人たちであったのかを考えさせる」ような再建された村のかたちの野外博物館計画を立て始めた。この考えはフォードが初めてではない。あるスイス人は1790年頃にこうしたかたちの博物館を提案しているし、実際、アーサー・ハゼリウスは1891年にスウェーデンのスカンセンでこの考えを実現している。しかし、フォードは特徴的なアメリカ的ビジョンをもっていた。彼は、1923年にマサチューセッツ州サウス・サドバリーにあった、1863年のロングフェローの『物語』によってウェイサイド・インとしてよりよく知られているレッドホース・タヴァーンを獲得したことによって、その考えを実行に移し始めた。これは、大きな建造物を移設する先駆的なプロジェクトとなった。

ついにその完成の日が来た。1929年10月21日、トーマス・エジソンの白熱灯発明50周年記念の日、ミシガン州ディアボンのヘンリー・フォード博物館とグリーンフィールド・ヴィレッジが、エジソンによって開館された。フォードの脳が生み出したこの博物館は、保存と大衆教育のために、歴史的なアメリカの建築物を、それとは異なる本来のところから新しい場所に移して、「歴史的」環境を再生した最初のものである。この成功は、他にも同様のものを数多く生み出すことになった。

ヘンリー・フォード博物館とグリーンフィールド・ヴィレッジは、ある種の産業博物館であった。というのは、スカンセンとは異なり、産業技術の起りを描写したのである。しかし、1920年代、30年代の『ミュージアムニュース』誌のページは、それとは異なる種類の産業博物館の提案で満たされていた。1925年、オスカー・フォン・ミラーは、ドイツのミュンヘンに彼が長い間計画を練ったドイツ科学博物館を開館した。このドイツ科学博物館は科学技術博物館の新しい時

代の始まりとなった。フォン・ミラーの博物館は、相互作用や触って動かすような参加型のもの、例えば、機械の動く縮尺模型、探検することのできる本物そっくりの鉱山の採掘坑、科学的原理や現象の（実験による）演示といったものが呼び物であった。これに対して、アメリカの博物館には、比較できるような来館者をひきつけるような仕掛けはなかった。

ドイツ科学博物館はアメリカの博物館と産業経営者にとって手本となり、（ドイツ科学博物館のような博物館が）アメリカの技術と大産業の成功を一般に示すことのできる博物館の一つの型となった。1925年のフォン・ミラーによるアメリカ講演旅行の後に続いて、アメリカ博物館協会理事長（Director）のチャールズ・R・リチャーズは彼のヨーロッパの博物館見学報告として『産業博物館』（1925）を出版し、2年後には『産業芸術と博物館』を出版している。これらの活動によって掻き立てられた興味は、多くの美術館での「産業芸術」展を開かせることになった。産業芸術とは、装飾芸術の味わいやデザイン原理が反映した工業的に生み出される日用品なのである。技術に対する関心はまた、新しい科学博物館の創設に勢いを与えた。そのなかで、最も有名なものはシカゴの産業科学博物館（1926年創立）で、1933年、「発展の世紀」博覧会の期間中に開館した。

新しい科学技術と新しい展示技術は、博物館における教育と楽しさに注意を払うこととあわせて、1920年代後半から30年代初頭にかけての時期、来館者研究の増大を促した。この背景となる影響を与えた人物は、エドワード・スティープン・ロビンソンである。ロビンソンは、心理学者で、シカゴ大学、そして後にはエール大学で教えているが、彼は、学習と記憶、仕事と疲労、そして心理学の社会的問題への応用という心理学の新しい領域の研究に貢献した。彼の最初の博物館に

関する研究は、「博物館疲労」の問題であった。ギルマンが先に博物館における肉体的な疲労を調査したのとは異なって、ロビンソンは、シカゴ芸術協会と協力して精神的な疲労に焦点をあてて調査した(1925)⁽⁶⁾。彼はまた、特に博物館の社会心理に関心を寄せ、そのために博物館専門職員をエール大学に呼び、1年間の相互研究を行った。このことから、公園管理者、ライブラリアン、博物館の専門研究職員 (curator) と博物館の教育担当者 (docent)、地域フォーラムのコーディネーターのための特別な大学院クラスでの訓練課程ができあがった。

大恐慌と博物館⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾

エジソンによって開館された1929年の秋の日、多くの博物館がそうであったようにフォードの新しい博物館は、国中で最もバラ色の未来があると思われていた。3日後、株式市場が崩壊し、大恐慌として知られる経済崩壊がひきおこされた。一部はそうはならなかったが、多くの博物館がこの時代に風化させられた。しかし、1933年にフランクリン・ルーズベルトが大統領に就任し、ニューディール政策が始まった後は、国家的な遺産を保存し、人々に文化的、教育的刺激を用意しようとする新しい力が、アメリカの博物館に加わった。それは連邦政府である。

1877年、議会によって正式に設立された合衆国国立博物館と1862年創設の陸軍医療博物館の他には、連邦政府は博物館の活動にほとんど関わっていなかった。実際、1906年の古物法 (Antiquities Act) は、公有地における先史時代遺跡及び考古学的遺跡の保護のためのいくらかの基準を用意し、出土資料が公的な博物館に保存される条件で発掘を許可したが、後の歴史の明らかにするように、この法律はほとんど威力のないものであった。しかしながら、ニューディール政策の始まった1935年、史跡 (保護) 法 (Historic Sites Act) が議会を通過した時、歴史を保

存する、より大きな力が与えられたのであった。

そうした法律制定の動きはおおよそ20年前、国立公園局 (National Park Service) が1916年に設立された時に始まった。国立公園の仕組みは、1872年にイエローストーン国立公園から始まったが、1933年までに、景色の良い自然、歴史的記念物、古戦場、国立墓地、考古遺跡、歴史的に興味深い多種多様な建物といったものが、一部は内務省、一部は農務省、一部は陸軍の管轄下にあるというように、国立公園はばらばらに拡散したものの集まりとなっていた。新大統領はこの全てを変えたのである。1933年6月10日、ルーズベルトは、全ての史跡の管轄権を連邦から国立公園局に移管する行政命令に署名した。この移管の目的は単に行政的な整理統合というばかりでなく、アメリカの遺産の保護にあった。

史跡法は1935年に、これに続いた動きである。「近代の工業社会の状況」が多くの史跡や歴史的建造物を脅かしていることを認識して、この法律はアメリカ人のインスピレーションと利益のために、史跡、歴史的建造物、国家的意義のあるものを保存することを国家的理念としたのである。さらにこの法律は、史跡の全国調査、内務省長官に歴史遺産の修復と維持の権限を与えること、そしてこの努力にあたって連邦政府、州、地域自治体と教育機関との間の協力関係を作ることを求めている。

1935年の史跡法はまた、植民地時代の歴史や地域の歴史の顕彰や、その一部は1932年のワシントン生誕200年記念式典に促されたものだろうが、国中を席卷した感のある装飾芸術運動を支える役割を果たした。アメリカ博物館協会理事長 (Director) のローレンス・ベイル・コールマンの1933年の著書、『歴史的建築の博物館』—これは、当時アメリカで公開されていた500件以上の歴史的な

建物の包括的な研究書である一が、この動きに基準と指針を与えた。『ミュージアムニュース』は同年の流行を「最近のアメリカの大衆は、アンティーク熱のウィルスにひどく感染している」と記している。

連邦政府の歴史についての活動と大衆の歴史的関心は、アメリカ経済の上昇と愛国心の高揚を必要としたまさにその時に、このように調和したのである。『ミュージアムニュース』は1933年12月号で、民間事業（支援）局（Civil Works Administration-CWA）の基金が、「博物館（創設）のプロジェクトの実行や、資料整理、カタログ作成、あるいは記録との照合、図書室の改善、交換可能な資料の目録作成、コレクションの整理と保存、そして展示の再構成といった様な（なかなか完全にはできていない）裏方の作業をきちんと済ませるために」利用できると述べている。1934年までにCWAは考古学的遺跡の発掘、群役所古文書の目録作成、動物園の獣舎の改良といったプロジェクトに基金を分配した。緊急救援局（Emergency Relief Administration-ERA）は、州レベルでの同様のプロジェクトに資金提供をした。

ニューディール政策の進展につれ、政府出資のプロジェクトが多数現われ始め、それらの中には、正式に立ち上げられたプログラムとして具体化したものもあった。それらの多くは博物館を支援するものであったり、あるいは直接的に博物館を巻き込んだりするものであった。その目的を明らかにするために、建築、芸術、演劇、記録文書、出版物、そして自然保護といったいくつかのプログラムを見てみよう。

建築の計画には二つのタイプがあった。すなわち、実際に（新しい博物館を）建設することと歴史的建築物を保存することであった。公共事業局（Public Works Administration-PWA）は、アリゾナ州トゥマカコリ、テキサス州サンジャシント古戦場、ニュージ

ャジー州モーリスタウンを含むたくさん博物館や記念館を国立公園内に建てた。また、PWAは州立博物館をアリゾナ大学に、カンザス州ウィチタには美術館を、そしてダラスの自然史博物館を建設した。また、PWAはワシントン特別区のピアース製粉場、ジョージア州のプラスキー砦、ペンシルバニア州オールドエコノミーの建物を修復した。国立公園局（NPS）は国立公園内の建物や記念物、歴史的地域、を修復し、議会図書館とアメリカ建築協会（American Institute of Architects）と協力してアメリカの歴史的建造物調査（Historic American Building Survey-HABS）を実現した。HABSは歴史的なアメリカの建物を現地調査し、測量図や写真、地図によって記録した。そして、これらの記録は議会図書館に永久保存されている。

博物館は財務省の芸術プロジェクトの中で、いくぶん異なった役割を果たした。それは次の三つである。第一は、短命に終わったものだが芸術公共事業企画（Public Works of Art Project-PWAP）、これはCWAの基金による恐慌救済プログラムであった。第二は、絵画彫刻セクション（後の美術セクション）で、新しい連邦郵便局と連邦裁判所を飾るために、無署名コンペによって絵画と彫刻を獲得した。第三は、レリーフ・プログラム（Treasury Relief Art Program-TRAP）で、既存の連邦政府の建物を装飾するものであった。これは労働改善局（Works Progress Administration-WPA）の基金によるものであった。最初の二つのプロジェクトは、国や地域の芸術コンペの審査委員会を構成するのに博物館のキュレーターたちを活用した。キュレーターたちもまたそれに応じた。第三のプロジェクトにおいても、博物館のキュレーターたちは、しばしば芸術家たちとワシントンの事務所との間のコミュニケーションの掛け橋となった。これらのプロジェクトは、しばしば誤って「PWA壁画」と呼ばれる芸術

作品を生み出したのであった。

とはいえ、博物館と芸術に影響を与えた最大の政府のプロジェクトは、WPAの下で行われた「連邦第一プロジェクト」として知られているものであった。それは、絵画、音楽、演劇、古文書、文芸の分野で実施された。財務省の芸術プログラムに比較できるのは、WPAの連邦芸術プロジェクト（Federal Art Project-FAP）で、これは、視覚芸術のあらゆる分野の作品を資金援助した。FAPは地方の組織と協力して多くの市に芸術センターを開設し、その国内展示部会（National Exhibition Section）を通じて巡回展を行い、博物館のために展示ケースを作り、広範囲にわたる教育プログラムを実施して、現代の芸術に対する関心を鼓舞した。FAP作品は、またしばしば地方の建物に加える装飾として、その地域の歴史や民俗を描くことによって、地域社会（の眼を）を、その歴史や民俗に再導入した。

アメリカンデザイン目録作成部会（Index of American Design-IAD）は、FAPの主要部分であった。ボストン美術館、メトロポリタン美術館（その他）と協同してこのプログラムは、博物館や個人コレクションにあるアメリカの手工芸品や民俗芸術作品の例を、画家たちに描かせたりスケッチさせたりした。初期のアメリカの装飾芸術の広範な参考記録がこのようにして集積された。これは今も国立美術館（National Gallery of Art）に保管されている。同様に、他のアメリカ風俗の記録は、「連邦第一プロジェクト」から出版されている。二つの舞台芸術の組織、連邦音楽プロジェクト（Federal Music Project-FMP）と連邦劇場プロジェクト（Federal Theatre Project-FTP）は、時々、博物館施設で来館者のために伝統的なアメリカの作品を演じた。

歴史記録調査会（Historical Records Survey-HRS）もまた「連邦第一プロジェクト」の一部であった。書記職員救済のために仕事

を与えるよう計画されたものだが、長く無視されてきた国、州、地方レベルでの行政記録を保存する必要に手が届いたのである。これは、巨大な量の歴史的資源を将来の研究者たちに残すことになった。最初の仕事は各州の群役所の記録の目録を作り、内容を書き取ることだった。これは、しばしば、まず「在り処を探す」ことを意味した。HRSの第二のプログラムはアメリカ出版目録部会（American Imprints Inventory-AII）である。これは、東部では1877年以前、西部では1890年以前の印刷本について図書館の目録を作った。HRSはまた、手稿本や個人文書の目録、教会古文書の調査、墓碑銘データの記録といったいくつかの小さなプロジェクト—それら全ては歴史家や歴史博物館にとって計り知れない用途をもつものであるが—を実行した。

連邦作家プロジェクト（Federal Writers' Project-FWP）は、「連邦第一プロジェクト」では良く知られたものの一つだが、これは主として「アメリカ案内シリーズ（American Guide Series-AGS）」を通じてといえる。このシリーズは、旅行案内、地域や地方の歴史の紹介、主要都市の説明、お薦めの歴史的地区や景色の良い場所の散策やドライブツアーという内容の編集であった。それは、観光旅行、アメリカ風、そして野外リクリエーションの風潮の全てを一緒に刺激した。と同時に、（このシリーズが編集されることによって、）地域、地方、州の博物館が記録され、その利用が促進された。

ニューディール政策を通じての公園開発、森林再生、土壌侵食対策、洪水コントロールの努力によってよく知られている民間自然保護団（Civilian Conservation Corps-CCC）は、また、博物館事業や保存事業も実行した。国立公園局（NPS）と共に、CCCはジオラマ模型、地図と展示、そして遊歩道の案内や解説の札を作り、また、フロリダ州のク

リンチ砦などの修復(博物館に変えられた)、ヴァージニア州のジェームスタウン、ヨークタウン、フレデリックスバーグ、スポッシルベニアの歴史的地区の開発、いくつかの考古学的遺跡の発掘などを行った。その仲間の組織である全国青年会(National Youth Administration-NYA)は、サンフランシスコのデ・ヤング美術館で博物館の事業として操り人形劇を演じ、博物館の夜間や土曜日の午前中の開館を維持するために、学生たちを年少者に対する説明者に使った。

1930年代が幕を閉じると同時に、ニューディールの救済プログラムも終焉を迎えた。それらのプログラムが、経済回復が最終的に足がかりをつかんだ時に終了されたのかどうかは常に議論のあるところである。1939年以後、残ったプロジェクトは州に移管され、その全ては1943年、人員と物資が戦争努力のために必要とされるに至って終了した。しかしながらなんと多くのことが成し遂げられたのであろうか。それ以前にも以後にも、これほど多くの広範囲の努力と協同が博物館と連邦政府の間で続けられたことはなかった。『ミュージアムニュース』のページに、大不況下で新博物館の開館や古い博物館の生命を維持することを助けてきた他の資金源(最も著名なものはカーネギー財団とロックフェラー家である)があった証拠を示しているというものの、連邦政府との協同が、それぞれの地域の文化と教育に焦点をあてた今日の博物館を作ってきたことは明らかである⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾。

博物館と国際協力

第一次世界大戦の休戦は、国際連盟(1920~1946年)の創設に示されるように、1920年代、30年代を通じての大規模な国際協力の探求を開始させた。それゆえ、この期間の博物館のことを書いてきた最後を国際的な様子をもって終えるのが適当であろう。この期間を通じ、いくつかの国際的な博物館組織が国際連盟の保護の下に作られた。最初の

ものは、1926年に創設された国際博物館事務局(International Office of Museums-IOM)である。これは今日の国際博物館会議(International Council of Museums-ICOM)の前身である。国際博物館事務局は、国際知的協力委員会(International Institute of Intellectual Cooperation)の一部門として作られた。この国際知的協力委員会はユネスコ(UNESCO)の前身である。博物館事務局の機関誌『ムーセイオン』は、1927年に創刊された。1933年には、国際博物館事務局は歴史的記念物委員会を創設した。これは国際記念物遺跡会議(International Council of Monuments and Sites-ICOMOS)の前身である。第三の組織は、国際考古学美術史協会事務局で、1934年に国際知的協力委員会によって作られた。この組織は、調査研究、学生や教師の交換、世界中の考古学的調査を調整することが目的であった。

1920年代、30年代の20年間は、全国規模での経済や社会の問題があったにもかかわらず、アメリカの博物館にとって発展と新しい専門主義の約束を達成した時と見える。またこの20年間は世界の博物館の間での協力の萌芽期と見ることができる。こうした協力は、一つの世界戦争の終焉によってもたらされたものなのだが、しかし1939年までには、暗雲が海外に集まりだし、第二次世界大戦の猛攻によって脅かされることになった。なんとも皮肉なことに、文化を保存するという仕事の基礎的な発展のあったこの20年間の最後に、世界は避けられない文化破壊—文明それ自身の終わりを、ただ期待することしかできなくなってしまった。

第2章 全国的サービスの確立から社会的異議申し立てまで：1940、50、60、70年代のアメリカの博物館

第2次世界大戦中のアメリカの博物館

1940年代を通じ、一般大衆と創設団体の双方からの圧力が、利用者の要求や興味に対

する新たな責任をアメリカの各種の教育・文化機関に負わせることになった。1939年のヨーロッパにおける戦争の開始に伴い、また特に1941年12月の真珠湾攻撃以後は、博物館は新たな挑戦を課せられた。枢軸国の攻勢の脅威に直面した国民を団結させる必要が、博物館を「伝統的な」アメリカの価値を確認し、育てる役割に投げ込んだのである。

1930年代の終わりは、さまざまな領域で移行期であった。社会科学調査サービスの利用と学術的訓練を受けた人間を博物館職員とすることは、博物館における権力が上流階級のエリートから専門職エリートへと移ったことを示した¹⁴³。理事会は「旧来」の上流階級の資金を維持し続けよう（としてこの人々を理事会メンバーとし続けよう）とするが、理事会の多くの若いメンバーは、博物館をもっと会社組織的なモデルに近いものにしようとするを基底の関心事とするような企業の幹部などから就任するようになった。そうした政策づくりの担当者たちや職員たちの変化は、博物館の教育的な使命に深い影響力をもった。

これに加えて、1930年代の深刻な財政危機が、真剣に多くの博物館の事業を切り詰めることや、閉館することを迫っていた。能率的な熟達者たちは政府官僚としての影響力を働かせ、企業精神を持った理事会は、その機関の持つ資源の効果的な経営に責任を持つ博物館専門職を雇い始めた。博物館経営資金の税金ベースの収入への依存が増加したこと、大恐慌を通じての政府資金に基礎を置こうという要求の増大は、博物館がその資金のあり方を正当化しようとするならば、地域社会における支持基盤を拡大する必要があることを明らかにした。博物館は政治家や財布の紐をコントロールしている者たちに、博物館が経済復興や、全体主義に反対する戦いや、戦争の勝利に貢献していることを確信させなければならなかった。

戦雲が合衆国にかつてなかったほどに集まったように見える1941年3月、ロチェスター美術・科学博物館館長のアーサー・パーカーは、1935年に彼が創刊した雑誌『博物館人 (Museologist)』の購読者にあからさまではない形で影響を与えようとした。クリーブランド美術館のJ・アーサー・マクリーンは、博物館が、ものごとを可能な限り正常に保つことによって国民の士気を保つことを推奨し、また、ワーチェスター自然史協会では、その主張は博物館を沈思黙考の聖域として維持しようというものだった。しかし、パーカー自身にとって、「試練にある文明」の下では、活動家としての姿勢が求められた。博物館は、地域社会に対して新たなサービスを約束しなければならないし、「創造的な教育の最新の発達のシンボル」とならなければならないのである¹⁴⁴。

戦争のネガティブな影響が現われるのに時間はかからなかったし、じきに、博物館はもっとより多くのことを求められていることを認識することになった。最もすぐに表れた結果は、男女共に、軍役やその他の戦時の仕事につくために博物館を離れたことによる職員の大規模な減少であった。1942年の秋、ガソリンとタイヤの配給割り当て決定の衝撃は、政府の物資配給局による新たな社会的分類の位置付けの結果であると感じられた。博物館は教育機関というよりもリクリエーション施設と位置付けられ、遊園地やその他の純粋なリクリエーションセンターなどと同じ制限の下に置かれることになったのだ。

この新しい社会的分類は博物館にとって厳しい風であった。シカゴ歴史協会とバッファロー科学博物館は、学校グループの来館者の急激な減少に見舞われた。ニューヨーク市教育委員会は、潜在的な敵襲に直面する子供の安全に対する両親の恐れに対応して、博物館への見学旅行を中止した。しかし、国立美術館の教育監督官のラモント・ムーアは、ガソ

リン配給制は、「民衆が博物館に容易にこられないこの時期は、博物館にとってある種の館外サービスを発展させる大きな機会である」といった。

1942年の初期、博物館館長たちがメトロポリタン美術館のフランシス・ヘンリー・テイラーの招待でニューヨーク市において会合し、どのように博物館が戦争努力に応じるべきかを論議した⁶⁹。彼らは、博物館は人々の精神を元気づけることとインスピレーションの元になるものを提供することによって最大限のサービスをするという誓約を打ち出した。いくつかの博物館はアメリカの戦争政策を支持する展示や企画を送り出した。例えば、ロチェスターで、アーサー・パーカーは多様な戦争努力についての毎月の特別展示を行い、トレド美術館はアメリカの同盟国の芸術を展示した。しかし、それらの展示は、また、支配層のエリートたち、特に、博物館の活動に影響を与える財政資源と、事業を進める手順を手中にしてそれらをますます駆使するようになった法人部門の文化的ヘゲモニーを確かなものとした。

博物館は、博物館の教育的使命の拡大や公共サービスプログラムの全ての形のものへの関与を増大させて、戦時中の国民が直面した危機に対応した。しかし、博物館が用意した学習機会の変化は、来館者に批判的な目を持って展示や企画を審査することを奨めるものではなかった。戦争終結までには、物理的、心理的、知的なコレクションへの接触が増大することによって重要なステップが踏まれたにもかかわらず、アメリカの博物館は、依然として、民衆のための博物館にとどまり、必ずしも民衆の博物館ではなかった。

文化の抑制：戦後の博物館

戦後のアメリカは、戦時中には手に入らなかったあらゆるものを消費できるようになって、長く据え置かれてきた物質的満足感に浸っていた。しかし、当時のアメリカの人々

は、大きく変化した世界と世界情勢のもたらした新たに据えられたリーダーシップをとる役割に直面していた。

戦争の心配は、今や冷戦についての心配に置き換わった⁶⁹。1950年代を通じて、安全は国外では共産主義者の広がりを読み止めること、国内的には伝統的な生活方法を守ることにおかれていた。国内的な家庭主義は、性的な役割を固定化し、核家族を礼賛し、新たなアメリカ的な労働から消費までの倫理を作り上げ、広く浸透したコンセンサスを重視する政治を促進し、ベンジャミン・スポックからノーマン・ピントック・ピールにいたる専門家の助言の権威を受け入れ、国内の共産主義の破壊活動分子から、世俗主義や物質主義に見せかけた国民道徳への脅威にいたる、あらゆることに反対運動を繰り広げるような市民のあり方を支持した。戦争中に作られた女性の楽観主義、アフリカ系アメリカ人、労働者階級の勃興といったことがらは、1945年の日本の敗戦以後急速に消滅した。

共産主義に対する深く根付いた恐怖と原子爆弾の脅威が、1948年以後の支配的な政治となったように見える。そうした政治によって作られた雰囲気は、特に市民との協同に依存し、納税者による財政的援助に頼っているものや、公共の善意に支えられている博物館にも明らかなインパクトとなった⁷⁰。マッカーシー時代を通じて、博物館は、論争を刺激するような芸術問題や社会問題は避けた。例えば、1949年から1950年のボストン美術館への批判や、共産主義者だといわれた者の作品を展示したグラス美術館に対する攻撃は、震え上がらせるような影響を与えた。博物館は社会的な挑戦より、その地位を支えることや、論争を惹き起こすような展示より安全な展示をすることが賢明であることを理解した。

確かに大恐慌や第2次世界大戦から博物館が学んだ最も重要なことは、博物館もその

教育的任務を市場経済の仮説や要求に適合させなければならないということであった。もし、博物館が教育的、リクリエーション的な市場で成功裏の競争を望むなら、協力的な領域の方法に適応しなければならない。これは、顧客が何を求めているかを見出すことを意味していた。しかし、市場の動向にアプローチする土台となる仮説は、主流の興味と資金源にアピールするものであることであり、社会的な批判や実験的なことに乗り出さないことであり、博物館の中心的な顧客である中流階級を押しつけることになるような論争的な話題を引き受けなければならないことであった。

フリーマン・ティルデンの古典、『遺産の解釈』（1957年初版）は、博物館専門職が展示づくりであれ、展示解説であれ、また印刷物のかたちであれ、コレクションを来館者に提示する方法を変化させる重大なインパクトをもっていた。ティルデンは展示資料と関係しない解説や来館者の経験と関わらない解説は無駄であると主張した。彼は、解説員に「コレクションの目録を端から暗誦するよりも物語を語れ」と励まし、彼の著書の読者に来館者は博物館に楽しみを求めてくるのであって、教えられることを求めてくるわけではないことを思い出させた。

歴史解説のこの新しい精神の最良の例の一つで、同時に、博物館における冷戦イデオロギーの影響力の最も良く現われたものは、ニューヨーク州クーパースタウンの農民博物館で行われた1958年の「農民の年」と名付けられた田園生活の展示であった。このテーマ展示は、簡単な絵と専門用語を使わない話しかけ口調の解説パネルを伴い、注意深く選ばれた資料を並べて、四季を通じての19世紀のアメリカにおける農民の生活と労働を描いたものであった。それはまた、「つい昨日の普通の人々、日常の仕事をしている普通の人々が、ただ大きな森のある偉大な国を作り上げた」という物語を語っているものであ

た。農民博物館のような展示は、平和の満ちあふれた王国で、国民にとって最も永続的な価値のある苗床としてのアメリカの田園を描いたノスタルジアのある生活の展示であった。

しかし、この展示には別の隠された意味があった。額に汗して働く、自己抑制のできる、強固な個人主義を持つ、良識のある普通の人々が、荒涼とした原野を生産的な農地に変え、それによってアメリカの民主主義、自由市場文明の偉大さの基礎を据えてきたことへの祝福であった。アメリカの社会には階級や敵意はないというようなイメージは、抑圧された大衆の蜂起や搾取階級の資本家を打倒するという呼びかけのような共産主義者のサイレンを完全に包み込んでしまうものであった。

このような形で確立された文化は、この時代の中間文化の文学や映画、—それは、権威や、自己規制とシステムに裏打ちされることの重要性を尊重することや、仕事に専念している専門家や、地域社会を意識したビジネスマンに対する尊敬を促進するものであった—に反映している。同時に、企業と他の確立された機関が、消費者と民衆の意見を操縦するために社会科学や行動科学を応用する努力を協定した。こうした技術は、ビジネスへの関心が理事会や館長たちの間での影響を増大させるに従い、博物館経営にも適用された。このような民衆との関係づくりと広告は、1950年代には次第に博物館の対外的な作戦の重要な部分となっていった。ニューヨーク近代美術館、建築・工業デザイン部門のアシスタント・キュレーターのハーウィン・シーファーが『カレッジアートジャーナル』1948-49年冬季号で示唆したように、「個人的な所有（物）を楽しむという人の本性は強い、そして、博物館にとって、人々の嗜好を家庭における物の品質を楽しむほうに向けることを助けることは、まったく適切なことなのである。」

1947年の中西部博物館連盟の会議で、グランド・ラピッズ公共博物館館長、フランク・デュモンドは、彼の博物館がサービスを拡大し、新しい来館者に手を伸ばし、資金を倍以上にした方法をビジネスライクなやり方で述べている。これは、メディアにおける高品質の広告と人々の関心を引く物語、時事的な関心のある話題にコレクションを関係付ける攻撃的な市場開拓計画、館外プログラムと貸し出し展示の拡大、無料のサービスを用意し景品やサンプルを配布して一般の人々の好感を醸成する、といった方法を組み合わせることによって成し遂げられた。デュモンドがいうように、こうした政策は、博物館が人々の生活にとって、常にタイムリーであり、適切であるように思われることを確実にするというものであった。

デュモンドは同僚たちにこうアドバイスした。「われわれは、博物館サービスの小売人として、現代の販売方法、合法的な販売促進の離れ業、広告の仕方に「賢く」なる必要がある。」デュモンドは、彼の博物館の成功の教訓は、博物館は、「人々の前に、博物館の名前、博物館のサービス、人々が関心を持つ品物、経験によるユーモラスな視点を保持する」べきであるということだと述べた。彼は、ペイオフが財政的支持を増大させたことと結論している²⁰²⁰。

博物館教育部は戦後を通じて増加した。しかし、教育的なプログラムの拡大に最も貢献したのは、ボランティアたちの数の意味のある増加であった。有給の専門職教育担当者ほとんど二倍のボランティア達がいた。このボランティアの大半は、市民グループや専門化グループ、特にジュニア・リーグに属している教育のある中・上流階級の女性たちであった。労働力として兵隊が帰還することによって、女性たちは戦時中に手中にした地位を失っていった。多くの女性たちが、市民的な仕事や慈善事業の仕事を通じて博物館に加わ

ったのであった。

ドーセントとして奉仕する女性たちは、ほとんど例外なく、白人のかなり豊かな部分の者たちで、家庭の外で働く必要のない者たちであった。その大部分は、都市の良い地区に住んでいるか、主要な大都市の周辺に広がった郊外の新しい住宅地区に住んでいた。平均的に、彼女らは大部分の人たちより以上の公式な学歴を持っていた。このように、家庭背景、教育、個人的な経験によって、これらのドーセントたちは、優勢な文化のもつ価値観、態度、信仰を表し、博物館を、さらに中間文化の価値を育てるものにすることに貢献した。

「リベラルな」博物館学者の哲学としての保守主義は、国際女性衣料労働者組合のマーク・スターの記事によって明らかである。彼は1949年1月1日の『ミュージアムニュース』で博物館は労働者に対して何ができたか知りたいと述べている。労働者とその関係者たちは、経済的に、また社会改革のために彼らにしばしば苦い闘争を与えた過去に対して郷愁など抱いていないと述べている。労働者たちは、彼らの将来において何が起ころうとしているのかにより以上の関心があり、彼らは博物館を必要な社会変化を効果的に進めることのできる鼓舞されたダイナミックなリーダーシップを持つものと見ていた。

「博物館であれ、その他のものであれ、知識への自由なアクセスというものは、常に、地位それ自身の中にある感覚を鈍らせ、心を腐らせる自己満足からわれわれを救ってくれるだろう」とスターは見ている。しかし、それはおそらく、博物館をコントロールしていたエリートたちを通じて身震いするような恐怖を宣伝した、当時の共産主義者への偏執狂的な攻撃についての言及であろう。「なぜ展示は危ない幻覚との戦いに役立たないのか」と彼は尋ねている。「国際的な法や秩序にある困難さの醒めた研究は、現今のヒステリー

に屈服するよりもっと助けになるであろう。」博物館に対する脅し以上のものでさえあったのは、スターの展示に関する示唆であった。その示唆とは、能率的でない道具を使っている満足な給料の支払われていない労働者の無能さについての展示や、その他には、国が異なれば生活の基準も異なっていることに関する展示といったものであった。

そうした展示をすることは、アメリカの博物館は、合衆国における階級闘争の存在を認めなければならないということであろうし、その人口のうちのある部分から搾取していることを白状しなければならないということであり、われわれの周囲を取り囲む技術的・産業的進歩の神話を捨てなければならないことであり、また、アメリカの歴史の見方についてのコンセンサスの基礎を掘り返さなければならないということであろう。これら全てのことは、企業からの基金の喪失を導き、反米主義を勢いづかせることになるだろう。博物館専門職にとって最も安全なのは、博物館の使命は調査研究なのか大衆教育なのかという論争をしているか、「農民の年」のような展示をしていることであった。市民権運動のデモ、大学紛争、初期の反戦運動の渦中でさえ、博物館はアカデミックな中立、無関心を装い、その時期の（もっと穏やかな）一般社会の物言いを（自らに）強いることを維持し続けた。あたかも、（既に）象牙の塔として確立していた大学と同じように、博物館は政治を超越していることが期待されていた。戦後期における博物館の展示の哲学と実践は、どこから見ても、アメリカの歴史と文化の一致した見方を支えるために関与してきたことを示している。

法人組織と社会的異議申し立て：1960年代と70年代²³⁰

1964年のアルビン・トフラーの著書『文化の消費者：アメリカにおける芸術と豊かさの研究』で、彼は、第2次世界大戦頃から

文化の急成長が起り、文化を消費する階級を生み出し、また、古くからの文化的エリート達の力を脅かすような文化産業が生み出された、と述べている。これらの文化消費者達は、劇場やミュージカル、博物館に空前の規模で押し掛けた。彼らは文化産業の作り出すものやサービスを楽しんだ。例えば、アマチュア劇場に参加したり、美術の講座を受けたり、芸術についての本や芸術作品を購入したり、いわゆる「文化的飢餓」を満たすために様々な方法で金を使った。1960年から1980年の間に、博物館の数は劇的に増加した。新しい歴史協会、歴史的住宅の博物館、野外博物館が創設され、建国200周年記念行事で生み出された関心に呼応してこれらの施設は成長した。多くの子供博物館や科学センターも、この同じ時期に作られた。1970年代は車を使った移動展覧会や、その他の形態での出張サービスの全盛期であった。例えば、博物館は高齢者向けの特別事業を発達させた。1980年代における美術館活動の三分の一は、過去20年間に始まったものである。文化的な急成長は、来館者、補助金、理事会に新たなレベルの競争をもたらした。

この時代の博物館は、また、反体制運動にも影響された。この運動は、政府に不満を抱いている中流階級の若者や、現代社会の科学技術中心の物質主義とは相容れない新左翼の知識人達に主導されていた。さらに、若者達の運動と、その若者達によるベトナム反戦運動への積極的な参加に加えて、公民権運動、ブラックパワー運動家の過激な物言い、フェミニズムの合唱の始まり、エル・モヴィエントのメキシコ系アメリカ人の権利運動、覚醒させられたゲイとレスビアンの意識などによって用意された意識の高揚があった。1960年代まで、ほとんど全てのアメリカの文化的施設は、地域や国民に支持される設立者の無私無欲の貢献といった文脈で書かれ、語られ、また、賞賛されていた。それが

1960年代から1970年代初頭になって変わり始めた。

1968年、マーチン・ルーサー・キング師の暗殺と、その後全国で起きた黒人暴動の後、リンドン・ジョンソン大統領が任命したカーナー委員会は、アメリカには白と黒という分離した不平等な二つの国家が存在するという報告書をまとめた。主要な博物館はカーナー・レポートへの反応が遅かったが、いくつかの博物館では、既に当時報じられていた社会的問題に手を着けはじめていた。

メトロポリタン美術館の館長、トーマス・ホーヴィングは、同僚達に、地域の中での社会的責任を果たすよう助言した。彼は、メトロポリタン美術館は、重要で今日的な社会的影響を持つ展示をする計画であり、1969年1月から始まる「我が心のハーレム」展からそれを実行すると発表した。ところが、その展示は、どうしようもない批判の嵐に晒されることになった。展示カタログは回収されねばならなかった。展示目録に掲載したアフリカ系アメリカ人の高校生によって書かれたエッセイに反ユダヤ主義の意見が含まれていたからであった。そしてまた、ハーレムでの生活の記録と称する写真の展示には、ハーレム・ルネッサンスにおけるアフリカ系アメリカ人芸術の流行を示す作品が一つもなかった。このことは、黒人社会を均質なものと暗示するものであり、世間知らずであり、白人と黒人との間の関係を示すことに失敗しているとして批判された。また別の批判は、その展示がハーレムの産物でというより、部外者の手で作られたゆがんだ像でしかないというものであった。様々な点で悪く受け取られた展示であったが、「我が心のハーレム」展は、主要美術館が現代社会の問題に手を延ばして行った初めての試みであった。この失敗が、博物館は政治の外にある、あることができる、あるべきだという博物館専門職の決心を強めることになったように思える。

ワシントン特別区のアフリカ系アメリカ人社会を調査することになった時、スミソニアン研究機構はかなり異なった取り上げ方をした。スミソニアンの長官（secretary）であったディロン・リプレイは、1966年の終わりに近隣博物館（neighborhood Museum）というアイデアを、初めて提唱した。翌年のはじめに、諮問委員会が活動を開始した。この諮問委員会は、スミソニアンの分館のおかれていたワシントン特別区東南部の各地区を代表するものであった。1967年9月にアナコスティア博物館が、地域社会の必要と興味関心を満たし、地域住民を政策づくりやその実行に積極的に巻き込むために開館した。この近隣に生まれ、育ち、地域社会の様々なプロジェクトで長く活動してきたジョン・キナードが最初の館長となった。「ネズミ：人の招いた苦痛」（1969）のような展示は、草の根の選択を反映し、現代的な問題に良くつながるものであった。アナコスティア博物館は、そのモデルをこれまでの博物館の主流に採るより、エコミュージアムやコミュニティ・センターに採り、そのため、アフリカ系アメリカ人の文化遺産や現在の社会問題に関連する展示、講座、ワークショップ、実演による構成を提供した。

1969年11月、ブルックリン子供博物館のランチの一つであるMUSEのスタッフ主催で近隣博物館のセミナーが行われた。その報告は、1971年に『市民のための博物館』として刊行されたが、そこには、主流にある各種の文化施設が関係しているマイノリティーの葛藤や怒りを含み、また、反映している問題がともに記録されている。編集者の一人であるエミリー・デニス・ハーヴェイが書いているように、近隣博物館を立ち上げる方法を開発するためのこのセミナーの意図した目的は、「そうした議論は成熟していないのだが、関係するマイノリティーグループが直面しているもっと基本的な問題に至るまで、

現実的な理解に陰らされ、同時に粗野な力で地元を持ち込まれた。」この会議は、博物館の職員たちは館外プログラムや分館の設置を通じて博物館の教育的使命を拡張していると考えていたが、評論家たちは、博物館を教育機関としてではなく、優勢な文化のイデオロギーを広げるための道具と解釈していることを明らかにした。

当時の、政治的、社会的風潮によってであろうが、1970年6月のアメリカ博物館協会の年次大会は、ニューヨーク芸術ストライキ運動と芸術家連合を名乗るデモ隊によって乗っ取られたことは、何ら驚くべきことではなかった。芸術家、フェミニスト、様々なマイノリティーグループからなるこの連合は、博物館が危機にある時期にもかかわらず、「いつもどおりの仕事」を続けようとするのを非難した。アメリカ博物館協会は、その解決のために、当時最も緊急を要する社会問題として人種差別、性差別、抑圧を認識し、博物館がそれらの悪に終止符を打つよう関与することを求める、このグループの初めの7つの要求を可決した。しかし、アメリカがベトナム戦争から手を引くことから女性、マイノリティー、「その他の抑圧された人々」のために博物館インターン制度を設けることに至るその他の要求については検討する時間がなかった。今ではごまかしも見えない収集、展示、教育計画における博物館の中立性が、問題とされたのである。主流をなしている博物館の教育哲学やその実践における役割が、支配的文化の社会政策の表明であると考えられたのである。

アフリカ系アメリカ人、アメリカ先住民、その他の民族の博物館や、非常に異なる優先項目を持つ文化センターが、主流をなす文化施設の時代遅れの意見によって、まだ周辺に追いやられている人々の必要や関心に出合ったことによって、1960年代に数多く作られた。書き留めておくべき重要なことは、アメ

リカ博物館協会の大会への抗議から四半世紀の間に、たくさんの考え方が実際の要求と同様に博物館の哲学と実践に採り入れられてきたことである。

アメリカの博物館は前例のない人気と、財政に深刻な負担を作り出す博物館サービスに対する要求に直面して、1968年にアメリカ博物館協会に、博物館の状況、博物館にふさわしくない要求、他の教育文化機関との関係に関して調査する特別委員会を作らせた。この結果は、『アメリカの博物館：ベルモント・レポート』として、1969年に刊行された。このベルモント・レポートの最終的な目的は、博物館に対する直接的な連邦の支援の実例を作ることにあった。変化しつつある観客の要求が、博物館をユニークな学習を提供する多面的なコミュニティセンターへと変えていったと記されている。しかし、博物館は、教師、学生、一般大衆によって博物館に課された多くの要求に応えるためのスタッフも資金もなかった。博物館は学校に協力し、教室での授業や「真っ先に始めよう」、「働く仲間」「視野を広げよう」といった連邦のプログラムへのサービスを用意したりしていたにもかかわらず、そうした博物館も何の財政的代償を受けていなかった。

「博物館は連邦政府によって教育機関としては定められていないために、一定の減税が拒否されており、広く教育機関に支給されている一定の連邦補助金から締め出されている」とこのレポートは述べている。このように、博物館は法の下では、第二級の教育機関とされ、基礎調査や、他の教育機関や一般大衆に用意した多様なサービスのための資金を得る事ができなかった。

1970年の質の高い環境教育法の可決によって、博物館は元気付けられた。科学博物館や自然史博物館は、初めて、当時の主要な社会的関心、環境教育に対応し、そして絶滅危惧種、都市のスプロールと野生動植物の生息

地保全、水質汚染、都心部の健康問題、都市計画などの関する展示や教育プログラムを提供することによって対応した。この法律は、「環境の質を守り、高め、生態系のバランスを維持するための地域教育プログラム」を提供する全ての機関に連邦基金を与えた。博物館は、連邦資金を与えられるにふさわしいと法律のなかで特に言及され、初めて政府の定義する教育的機関のひとつとして含まれることになった。

1970年代を通じて、博物館はベルモント・レポートが求めたさまざまなタイプの資金を連邦政府から獲得する努力に成功した。この間、その全ては1960年代に創設されたものだが、全米芸術基金、全米人類基金、博物館サービス研究機関や1950年代に作られた全米科学基金が、博物館の要求にかなう助成金のカテゴリーを作り出した。これらの基金はまた、数多くの教育部局プログラムのタイトルの下で利用できるものであった。この基金のほとんどは、展示、館外活動、教育プログラムといった形での博物館サービスの拡大に費やされた²⁹⁹。

1976年の建国二百年祭が近づくにしたがって、歴史博物館は、その数と入館者数、財政的支援のいずれについても顕著な増加を見せ始めた。しかし、1979年には、アメリカ地方史協会（American Association for State and Local History）の年報が記すように、「瞬く間に、歴史博物館は空前の数と活気を見せるまでに成長したが、全国の州や地方の歴史団体は歴史プログラムのための連邦、州、地域予算の引き締めに直面し、民間の慈善資金獲得をめぐる競争の激化に直面し、さらに、アメリカの機動性のパターンを劇的に変える燃料不足の恐れに直面していた。」

経済的に苦しいときに表れたもう一つの発展は、1970年代末と1980年代の博物館を特徴づける企業の雰囲気の進展であった。厳しい予算と、補助金支給者や理事会に対する責

任ある説明要求の増大は、経営管理、マーケティング、人事管理、その他の企業実践が、博物館をコントロールする人々にとってますます重要な関心事となっているという空気を作った。ますます、企業用語とビジネス・スクールで習った方法を博物館経営にどう適用したらいいかというアドバイスが、博物館学の論文に現れるようになった。

博物館職員の専門的訓練もまた、この時期に重大な変化が進んだ。カリキュラムと中級の現職経験者プログラムは財政や人事の管理運営に関する注意を含むものに拡大した。1978年、ジャン・ポール・ゲッティ財団は博物館経営研究所を開設し、中・上級マネージャーのための4週間の（企業における再研修のような）研究セミナーをカリフォルニア大学バークレー校で実施した。そこでは、博物館のリーダーや意志決定者が、マネジメントの重要性、博物館内部のマネジメント、博物館の外的な環境のマネジメントについて学ぶことができた。ゲッティ・モデルは、大学、アメリカ地方史協会、アメリカ博物館協会やそれらの地方支部が提供するさまざまなコースやワークショップで真似されることになった。

博物館の教育的使命に関して抱く、おそらく最もよく言われる企業的影響は、1970年代、1980年代を通じて発達したブロックバスター現象であろう。大部分の理事会が、企業の支援、連邦芸術基金、特別チケットの販売による入館料収入の増加、ミュージアム・ショップでの売上増、報道での高い積極的な評価の流布をもたらすブロックバスターに焦がれた。これらの大規模な見世物一珍しいものや美しいもの、精妙にデザインされた設備、より高度の教育、精力的なマーケティング戦略、専門化した売店を持つものだが、これらは通常いくつかの博物館を巡回した。

内容を大衆化し、あらゆる層の人々にアピールするように努力した結果、ブロックバ

スターは、博物館の平等主義精神の表明であるとして多くの博物館専門職たちによって誘致された。だが、主として学者や一部の館長やキュレーターたち同様、マネージメント専門職以外の者による批評として、否定的な影響、すなわち、博物館の建物が傷む、芸術作品の安全を脅かす取り扱い、パーマネント・コレクションの放置、過剰な市場努力、表面的に過ぎる教育効果といったことがはっきりと問題とされた。しかし、近づきやすさの要求、耳に入るキャッシュレジスターのベルの音、そして前例のない認知をもたらすメディアでの広報、そしてかつて見たことのない混雑する群衆によって、博物館マネージメントのトップの大部分はこうした批判に無頓着であった。

一部の博物館専門職たちは、博物館の教育的役割について保守的な見解を依然として持ち続けていたが、「革新的」であることは、大部分の者にとって博物館のプログラムを開発してゆく指針であった。新たな重点は、実物に導かれる教育と来館者自身が自主的に学習することを奨励することに置かれた。その他では、博物館での教育方法に焦点が絞られ、また博物館での学習と学校でのそれとの差異が探求された。しかし何よりも、1970年代に博物館は、展示を大衆化し、特別な観客に的を絞ったプログラムを開発し、また以前からの利用者との関係を向上させることを基本にして来館者を拡大することを博物館の教育的使命としたのであった。

もう一つのこの時期の博物館の教育使命の特徴として、新たにされた評価への関心があ

る。決して小さくない程度で、金が無駄に使われていないという確証を求める財団、企業、政府基金から説明する責任を求められた結果であった。教育部の規模が大きくなったことと、スタッフたちにとって博物館の活動における彼ら自身の役割を掘り出す必要との両者が、評価への関心が復活したことを説明してくれるだろう。博物館教育担当者は、学習心理学について一連の地域の会議に責任があり、博物館における種々の評価プロジェクトを指揮するため学者と協力した。

1970年代に着手された博物館教育プログラムにおいては、巨大なエネルギー、理想主義、そして熱心な働きと同じく、多くの新鮮な考えやイメージがあった。身体的なアクセスは拡大し、知的、社会的アクセスを増大させる努力がなされた。否定的な理解と耳障りな世間的な批評の大部分は沈静化した。しかし別のレベルでは、我々が博物館教育の歴史について知っているなにをあげようと、これまでなされたことの大部分は、単に古いワインを新しいボトルに入れたというような問題であった。博物館のサークルの多くは、主流の博物館の活動に必然的に含まれているイデオロギー的なメッセージを理解しなかったか、理解することを拒んだ。あまりに多くの理事会や博物館専門職が、未だに、館外活動や特定の観客に的を絞ったプログラムを通じて「新人」に贈り、「文化的に不利な立場にある者」に分配した狭義の文化の概念を保持することが彼らに約束された仕事であると思っている。（以下、次号）